

# 二度目のない男



玉子王子 著

## 一章 柱越しに聞こえてしまう女子トーク

道行く女たちが皆振り返るのがわかる。

前田太は中高とバスケ部員。長身を生かしたダンクシュートを決めるたびにファンクラブの女子たちが黄色い歓声を挙げたものだった。

当然のように、彼女らと関係を持ったしそれ以外にも中高で三ヶタもの女と関係した。

が、不思議と、続かない。

というより、一度関係を持つとそれっきり、二度目があった記憶がない。

関係した女はみなファンクラブからも姿を消す。嫌われるわけではない、姿を消すといっても転校するわけではないのだ、顔は合わせる。合わせると、むしろ気遣うような対応をされるほどだ。

しかし不思議と二度目はない。

今太はサラリーマンをしている。

ある日の夕方、居酒屋の席につき、ビールを注文する。

友人らと飲む予定だったが、みな運悪く急に予定が入ってしまい、一人で飲むことになった。

——適当に女でも引っ掛けるか。

考えつつ、暇そうな女がいないか周りを見る。

居酒屋だが、多角経営でファミレス的なこともやっていて親子連れも多少居る。

もちろんごちゃ混ぜではなく、居酒屋スペースと子供も入るスペースは離されている。

と、太の目が驚きに見開かれる。

後ろの席に座った四人の女たち。

見ると、皆ここ一月ほどの間に関係を持った者たちばかりだ。

今いる居酒屋がある繁華街でナンパした者たちなので、別にここにいっても不思議ではない。

女たちは気づいていない。

太も気づかれないようにさりげなく椅子をずらす。

背後には柱が立っているのだ、椅子の位置をずらせば女たちの席との間に入り、女らから太は見えなくなる。

背中を向けているとはいえ、スタイルがいいので気づかれるかもしれない。

振り返り、柱の陰に入ったことを確認しつつ思わずにやけてしまう太。

——参ったな、一人なら声かけられるが、四人同時ってわけにもいかない。

考えつつ、彼女らとも一回で終わった事は特になんとも思わない。なぜかそうなのだ、それは太にとってもう、不思議だが、普通のことだった。

その、一度ずつ抱いた女たち、OLかなにかの若い娘たちで、高校や大学の同級生なのではないかと思えた。

それが、ビールを飲みつつ女子トークに花を咲かせる。

「そうそう、この前スッゴイカッコいい人にナンパされたんだ」

「はいダウトー」

「本当だって！ ガチガチ！」

「あんた程度にイケメンは回ってきませーん」

「遊びなら私でもワンチャンあるって！」

「ぎゃははは！ 自分で言う？」

「でさあ、背も高いし、女と遊ぶの慣れた感じの人だったんだけど」

「私もそういう人にナンパされたことあるよ」

「そんなもん私もあるっつーの」

「実は私も」

「何で全員イケメンにナンパされたことあんのよ」

「そりゃ私はかわいいから」

「私も」

「私も」

黙って聞きつつ、太は頬が引きつる。

——それって全員俺の事じゃねえの？ こんな偶然あるんだな。いっそ俺が出て行って、5P誘うか！？ ……いや、5Pは無理あるか。いくら俺でもチ○ポは一本だしね！

ビールをあおる。気分がいい。自分がモテる証明のように、抱いた女が後ろに四人。呼んだわけでもないのに固まって座っているのだ。

しかも、今自分のことを話し始める感じだ。

とりあえず耳を澄ませる。

「で、どうだった？ そのイケメンくんの具合は」

「具合って！」

「ぎゃははは！ ……それがさあ……聞いてよ。イケメンなんて、チ○ポ小さいのが普通じゃん？」



「そりゃ顔が綺麗だからね。女性ホルモンが多くて、あっちのサイズがささやかなのは普通……って  
うか、今なんて言った？ アソコのこと……あ、聞き違いかな？」

「チ○ポ」

「直球過ぎ！」

「いやいや、女同士なんだから！」

ちらっと回りを見る女。

後ろに太がいるが、ちょうど柱の陰だ。

ほかの席には人があまりいないので、居酒屋の喧騒もあって多少声が大きくても誰も聞いていない  
と思っていた。

それは他の三人も同じである。

それになんとか太は気づく。

——女子の赤裸々トークと直接聞ける機会なんてめったにないぞ。こりゃ面白くなってきた。しかも  
全員俺と関係してるんだ。もしかしたら、一回で終わる謎のヒントぐらい出るかも。もしかしたら、  
下手なのか？ いやいや、それはないか。どんだけ女抱いてきたと思ってんだ。

「で、もしかしたらそのイケメンくんも、ご多分に漏れず粗チン○ンだったと？」

「贅沢いうんじゃねー、イケメンさんだよ？ 立たないならまだしも、イケメンなら粗チンぐらい普

通なんだからさ。不細工が粗チンだったら終わりだけど、イケメンなら全然オッケーっしょ」

「いやいや、私もそう思うんだけど……その……こんなだったし」

親指と人差し指の間に幅を作り、大きさを示す女。目を剥く周りの女たち。太には当然見えないが、なんとなくジェスチャーで大きさを示している感じは伝わっていた、が、とりあえず何もせず、黙って聞いている。

指と指の幅を見た女たちが真顔になる。

「え？ 何それ？」

「え？ やだやだ、そんなサイズってこと？ いや、私も見たことあるけどそのぐらいのイケメンくん」

「うわ、私も見たことあるよ。そんな人、結構いるんだ？」

「えー、あんたも見たことあるの？」

「それがね、この前ナンパしてきたイケメンくんとやっちゃったんだけど、その人もそんな子供用ポークビッツだったのよ。っていうか子供用チ○ポだったのよ」

「子供への使用を想定してんじゃねー！」

「っていうかロリコンとかガ○ジは大体デカいのよねえ。デケエくせに子供狙いとか、マジで奴らガ○ジだわ」

「とにかく、その人のこんな極小チン○ンで」

「私も、ちょっと前にナンパしてきたイケメンとやったんだけど、同じぐらいだった」

「実は私もなんだ。イケメンは小さいのが普通とはいえ、限度があるでしょうってのもんでさ、連絡先とか聞かずそれっきりで」

「そりゃそうよ。私も同じ。だってこんな小指だったし。あれはチ○ポじゃねえわ。えー、結局私ら全員、そんなクソチ○ポとやったことあるんだ？」

小指。

ゾクリとする太。

前田太などという**いかにも巨根っぽい名前**の太だが、実は一物は小指サイズだった。

実のところ、彼もさすがに自分のが小さいことは心の奥底でなんとなく察しており、他の男と比べる機会を極力避けてきた。

他人と比べて小さいのではという疑惑は、比較の機会を避けることで隠せる。

しかし、自分のモノが立っても小指並みの大きさであること自体は、目に見えるのだから自分に対して隠しようがない。

それだけに、女たちの小指発言には震えた。

——お、おいおい。小指サイズなんて別に普通だろこんなの。チ○ポが小指って、**日本人なら平均サイズ**なんじゃねえの？ っていうか、俺は顔がいいからさ、女性ホルモンが多いから？ 多少は小さいのかもってちらっと思わないでもないけど？ でもそんな言うほど短小なわけねえ。だってそれなら、女に言われるはずだもん。言われたことねーもん。だから俺は短小じゃない、はっきりわかんだね！

「ちなみに、小さいよって言ってあげた？」

「いうわけねーじゃん！ かわいそうだし。**ぶっ殺されるかも**だし」

「ですよねー！ 案外上位の短小くんほど、女に言われる事が逆になくて、だから俺は短小じゃない、はっきりわかんだね！ とか思ってたりにして！」

「ぎゃはははは！ ありそう！ これが日本人なら平均サイズなんじゃねえのとか心の中で思ってそう！」

——こいつらエスパーかよ！？

心を読んだかのごとき発言に汗が噴き出す太。もちろんそんなわけもない、太の考えなどまるで知る由もなく、というか彼が柱の裏に隠れているなど知りもせず、女子トークは続く。

「いやいや、流石に短小クソチ○ポくんたちだって、自分がどの程度の**身分**なのかはわかってるって。まあ上辺では分からないふりしてんのかもだけど、心の奥ではわかってるよ」

「そんな自分騙すほどのことかなあ？ チン○ンが小さいくらいでさあ」

「ちなみにあんたをナンパしたイケメンくんも小指だったんだよね？ 連絡先聞いた？」

「聞いたよー、チン○ン見る前にねー、で、エッチ後に消しといた。メリットねーもんあんなチ○ポの持ち主と付き合っ」



「ぎゃはははは！ あんたのほうかひでーって！ 何々？ 顔だけで付いて行って、ばっちり連絡先聞いて、そしてチン○ン見たら消去？ ひどくね？」

「だって小指だし」

「でも、お友達として付き合うぐらい。見た目はいいいんではよ？」

「でも小指だし」

「しかたねーか！ 小指じゃ！」

げらげら笑い転げる女たち。バンバンと机を叩き、食器が音を立てる。

後ろで、立って小指のモノをキュンキュンに引き締める太。小さいなりに縮み上がる。元から皮で重武装して使用時にも出ないありさまだが、それでもやはり普段より小さくなることはある。下には限りがない。

当然、肉袋も自らを去勢する勢いで引き締まる。

嫌な汗が浮く。

——いやいや、こいつらが言ってるのは俺の事じゃないわ。だって俺の、小指とは言っても**デカイ側の小指だし**。こいつらの口ぶりじゃ、小さいほうの小指だから、それは俺のじゃない！ いやあ、小さい側の小指かー、それなら確かに短小だよな！ さ、さすがに小さい小指じゃ、こういう事言われるわ。いやあ、デカイ側の小指でよかった！

「そういえば、小指って言ってもいろいろだよな。手が大きい人もいるし」

「あ、それをうまく利用してさ、自分のチ○ポは小指とは言え、デカイほうの小指だし、とか自分騙す奴もいそう！」

超能力者のように短小男の自己欺瞞を言い当ててくる女たち。

唇を噛む太。

嘔き出す女たち。

「デカイ小指って！ チ○ポ小さいといろいろ器も小さくなっちゃうのかなあ？」

「ちなみに、私の相手のイケメンくんは赤ちゃんの小指でした。ゆるゆるでした！ っていうか、入ったかどうかわかんなかったわー」

「私のも赤ちゃん」

「こっちも」

「やっぱ同じ人じゃね？」

「じゃあ私らついに竿姉妹だー」

「竿っていうレベルじゃねーんですけどねえ」

「小指姉妹だー、赤ちゃんの」

「意味不明だってばよ！」

手を叩く。

四人が話しているのはもちろん太のことだ。そんな同じような美形で小指並みの一物の男が何人も一人の女をナンパして同じように行為に及ぶわけもない。

だが同じ男だと確かめ合うすべはない。名前を聞いていたのは連絡先を行為前に交換して行為後に削除した一人だけなのだ。

なので、多分同じだろうという程度の解像度で話を進めていく女たち。別に実際に同じ男だろうが、似たような男だろうが彼女らにとってはどうでもいい。

太にとっては大問題だ。

短小を嗤われているのが自分のことである場合と、自分と似たような感じだがもっと小さい男である場合では彼にとっては天地の差がある。

が、確かめに出ていくこともできず、何とか話の中から「自分のことじゃない」と確信できるネタが出てこないかと耳を澄ませているしかない。

「ちなみに、エッチにおいてチン○ンの大ききさって意味あるかな？」

唇を噛んでいた太が目を輝かせる。

——そう、それが聞きたかった！ 答えは当然「意味はない」だ！ よく聞く話だ、間違いない！ さあ、聞かせてくれ、真実を！

「もちろん大ききなんて意味ないよ。うん」

目を輝かせる太。

強く頷く。

——そうそう！ 当たり前だよなあ？ 大ききなんて意味ないってのはあらゆる場所で言われていること！ 大きき気にしてるのは馬鹿な男だけ！ 女の方は気にしないんだよ！ ま、まあ別に俺は小さいわけじゃねーけど……いや、こいつらがちゃんとした女でよかった！

安堵で椅子に沈み込む勢いの太。

聞いた女たちは対照的に不満そうだ。

「えー」

眉をしかめ、頭を振る女。

横の女は怪訝そうに首をかしげる。

「あはは。うーん、それ、本気？」

聞かれた女はニマッと笑う。

「もちろん嘘っすよー。いい子になってみました！」

ギュ、と心臓が引き締まるのを感じる太。

——な、なんだと？ 嘘？ 何がだ？

「チン○ンの大ききなんて変えられないんだから、男の人にはそうやってあげるのがまあ礼儀というか、ねえ？」

「女の優しさ！ 大人の女の嗜み！」

「でも女同士の本音じゃねえ、当然」

「もちのろん、チン○んは、大きいほうが断然いいよね」

「考えて見りゃ当たり前なのよねえ、耳かきだとしたら、奥まで届くほうがいいに決まってるし……太さにしてもねえ」

「太いほうが、強く広げて刺激できるわけで、長くて太いほうが**エッチ棒**としての性能は明らかに上でしょ？ それがわかってるから、男の人だってデカイほうがえらいと思うわけで」



もちのろん、チン〇ンは、大きいほうが断然いいよね

考えて見りや当たり前なのよねえ、耳かきだとしたら、奥まで届くほうがいいに決まってるし……太さにしてもねえ

太いほうが、強く広げて刺激できるわけで、長くて太いほうがエッチ棒としての性能は明らかに上でしょ？それがわかってるから、男の人だってデカイほうがえらいと思うわけで

「それをねえ、女には否定してほしいって言われても。まあ男の人には「受ける」から否定するけど。世間一般向けにはね」

「でも、デ〇チンくんにはこっそり教えちゃう……君のアソコは高性能、ってね」

「要するに、大きさはじゃないなんて言ってる男はたてまえで慰めてあげようって思われてるだけの話よね」

「まあ、少々の短小ならテクや愛、**顔**でごまかせるけどさ」

「小指はきついっしょ」

「いっそ立たないならペニバンつけてって言えるけど、小指とはいえちゃんと機能するリアル棒の持ち主にそれは言えないわよねえ」

「棒ってレベルじゃねーとしてもねえ」

「っていうか立たないからペニバンつけろってそれは私は言えないわ」

「あ、よく考えたら私も言えないねそりゃ」

「ちなみに、立たない大物くんと立つけど赤ちゃん小指チ〇ポのどっちが上かな？」

「そりゃ流石に……ギリ小指チ〇ポじゃね？」

「まあ流石にね、流石に！」

「立たないよりギリで勝つよねえ」

「ここに実は、短小くんには救いになるでしょうね」

「それな！ 立たないよりやましっすよー、って言えば粗チンに苦しみ、絶望して、私ならとても女抱く気にならないのに、頑張ってる粗チン兄貴たちは泣いて喜ぶでしょうね」

女たちの爆笑を背中に聞きながら、震える手でビールを飲む太。

——いやいやいや、違うからね？ 違うからねー。俺の話じゃないからね。偶然俺が抱いた女たちが、同じようなイケメンにも抱かれてて、そいつが小さい小指だったって笑ってるだけで、俺は大きい側の小指だからセーフだからねー、セーフ。粗チンって程じゃないからねー。まあ大きくはないかもだけど。でも大きい小指だから、粗チンではない。セーフ。

別に面と向かって言われてはいないので、なんとか心の中でごまかすことができる。

というか、普通に考えて面と向かって粗チンを煽られるなどあるわけもない話だ。

「それじゃ、そろそろ店変えようか」

「っていうかもう今日は店の外でちょっと酔い醒まして帰ろうかな、盛り上がり過ぎて疲れちゃった」

「いやー、やっぱり女子トークの鉄板ネタは共通の男のおニンニンネタっすねー」

「共通とは限らないけどね」

「いやいや、そんな同じようなイケメンくんで、チ○ポこれっすよ？ えーっと、ちなみに背は？」

「高いよ」

「私の相手も、このぐらいかな」

「ほら、私のもそうだし。イケメンで同じぐらいの長身で小指並みのクソチ○ポって、そんな人が四人いるほうが……いや、そりゃそういう人も千人単位にいるんだろうけど、その中から私らにバラバラに四人ナンパしてくるって不自然っしょ。まあ、このうちの一人や二人は、同じような別の人もありうるかもだけど。でも、ほぼほぼ私らの相手同じ人だって」

言いつつ、席を立ち歩く。

——あ、ちょ。俺に気づくなよ！ って、俺は全然何一つ悪いことしてないのに、気づかないでくれとか……なんでこっちが負い目みたいなの……クソ、チ○ポが小さいからって。いや、別に俺は小さいくないけど。大きい側の小指だし！

思いつつ、女たちが通る通路の反対側を向く。

その横を通り過ぎる女たち。

気づかずに行く。

——良かった。

ホッと息をつく太。

背けていた顔を机に向ける。というか、別に女たちは他の客の顔など確認して出ていくわけでもなく、前を向いていても気づかなかったかもしれない。

——よかったってなんだよ。別に、あいつらに俺の顔見られたってどうってことない。むしろ、気づいてもらいたかった。俺のことを話してたわけじゃないんだからさ、俺に気づいても「ヤベえ、効かれてた」なんて反応はしないはず。その、「しない」ってところを見るチャンスだったのに。惜しいことしたぜ。

などと考えるが、声をかけて確かめるつもりはない太。

震える手。ビールを飲む。

飲もうとして、ガチャン、とビールが入った器を押してしまい、唐揚げの入ったさらに当てる。

「え？」

「なに？」

音に振り返る女たち。

ほろ酔いで満面の笑み。その顔が、一瞬で凍り付く。

「あ、ら……嘘……あなた……」

「ちょ、やだ、この人……この人だよ」

「ウツソ、私が言ってたのこの人……」

「あ、前田太」

一人は、行為前に連絡先を聞いていたので名前を知っていた。

青ざめる四人の女。

その顔は、明らかに「聞かれてた、どうしよう」という物だった。

それはつまり、今までの話は太の事だったのだと、太に対して明らかに示している。

これにより「似たような感じだが、自分より粗末な一物の男が笑われている、自分はギリセーフ」という無理のある説は完全に否定されることとなった。

女の一人が、引きつった笑みを浮かべる。

「あ、あ、あの……聞いてた？」

「な、何を？」

「いや、何をってこともないけど……ねえ？」

「男の人の価値はチン○ンの大きさじゃないよ！」

「ちょ」

「あんた、何言ってんの!？」

「いや、別に一般論だけど……そ、その……とにかく、気にしないで」

「そ、そうだよ。気にしないで」

「あ、だよね！ 私も言いたいわ！ 絶望しちゃダメって！ あ、一般論なんだけどね！」

「いやいや、君ら、何励ましてるのかな？ 励まされるようなこと、別に俺には何もないけど？」

「あ！ あ！ あ！ た、確かに粗チンは恥ずかしくない！ 慰められることはないし、慰められたって別にクソチ○ポが裏で笑われることにも、女を満足させられないことにも変わらないもんね！」

「ちょ、あんた！」

「あ、いや……と、とにかく……私らは別に何も話してないよね？ ね？ その、前田さん」

「う、うん、もちろん……俺も何も聞いてないし」

「だよねえ！ そ、それじゃ」

震えつつ、引きつった笑みで踵を返し、さっさと会計を済ませて店を出ていく女たち。

呆然と立ち尽くす太。

震えつつ、とりあえず便所に向かう。

途中で、女子店員とすれ違う。

チラ、と顔を見て目を輝かす。が、一瞬あと、ちらっとズボンを見て何か冷めた顔をする。

——こ、このガキ……聞いてたのか!？」

頬を引きつらせる太。気づいたのか、店員が体をこわばらせる。

「あ、ち、違います……この人小さいんだー、とか思ってないです！ いくらイケメンでも小指とかないわー、なんて全然……思ってないですから！」



走り去る。バックヤードに駆け込んでいく。

顔を赤らめつつ、トイレに向かう。

と、なんとなく後ろを振り返る。

すると、今走って行った女子店員がバックヤードからもう出てきていた。三人ほど同じような女子店員とともに。

指で、何かかなり小さいモノの大きさを示して満面の笑みで。

太に気づき、また慌ててバックヤードに戻っていく。

——お、女のどもっ……そんなにチ○コネタ面白いかよ！？

震えながら、何とかトイレに入る。

小さな個室だ。

扉の正面に窓。

扉を横に見て便器に座るなり、立って小便するなりだ。

普段なら真性包茎であるため、座り小便一択の太であるが、女子店員への怒りから今日は誤爆を恐れず、むしろ**誤爆狙い**で立ちションにすることにした——狙ったら誤爆ではない気もするが。

ズボンから小指を引き出す。引き出すというほどでもないが、

ちょこんと出し、先っぽを剥く。子供のように皮越しに発射してパンツやズボンまで被弾させるわけにはいかない。

と、そのころ、外に出た女たち。

店の陰に入り、しゃがみ込んでいた。

青ざめ、汗びっしょり。

「うはああ、ビビった！」

「ぶん殴られるんじゃないかかって思ったよ！」

「切れて当然の内容だったもんね、私らの話！」

太の気が変わって追ってこないかとひやひやししながら、チラチラ店の入り口の方を見る。

店の陰に入ったのは、太が追って来るなら店を出て左右のどちらかの道に歩いていくだろうと思ったからだ。

店の陰にいれば、盲点を突けると思った。

確かにそれはそうだ。

彼女らは、店の横の壁に寄り添うように座っている。

その頭上に、小さな窓がある。

店のトイレの窓。

そのトイレの中で、はっきりと太は女たちの話を聞いていた。

——おいおい、またあいつらの話が聞こえてくるんだけど！？ わざとか！？ いや、まあすぐどっか行くだろうけど……

思いつつ、緊張で小便が出ない。

出ないまま、小指を出して女たちの話に耳を傾け続ける太。

体験版終わり

この後更なる間の悪い短小煽りが続きます

嫌がらせで言っているのではなく、明らかに本人が聞いていないと思っている場所での女たちの本音トークが、偶然聞いてしまった短小男のメンタルをゴリゴリに削っていきます

そんな続きを製品版でぜひお楽しみください。